

Rafał Blechacz

Piano Recital



ラファウ・ブレハッチ ピアノ・リサイタル

2023年2月25日(土) 18:00開演
サントリーホール

6:00p.m., Saturday, February 25, 2023 at Suntory Hall

主催：ジャパン・アーツ

後援：駐日ポーランド共和国大使館



／ポーランド広報文化センター



ポーランド広報文化センター
INSTYTUT POLSKI TOKIO

協力：ユニバーサル ミュージック

ショパン：ノクターン ヘ短調 Op.55-1

F. Chopin: Nocturne No.15 in F Minor Op.55-1

4つのマズルカ Op.6

4 Mazurkas Op.6

- | | |
|---------|------------------|
| 1. 嬰ヘ短調 | 1. F-Sharp Minor |
| 2. 嬰ハ短調 | 2. C-Sharp Minor |
| 3. ホ長調 | 3. E Major |
| 4. 変ホ短調 | 4. E-Flat Minor |

ポロネーズ 第7番 変イ長調 Op.61 「幻想ポロネーズ」

Polonaise No.7 in A-Flat Major Op.61 "Polonaise-fantaisie"

ポロネーズ 第3番 イ長調 「軍隊」Op.40-1

第4番 ハ短調 Op.40-2

Polonaises No.3 in A Major, "Military" Op.40-1 / No.4 in C Major Op.40-2

ポロネーズ 第6番 変イ長調 Op.53 「英雄」

Polonaise No.6 in A-Flat Major Op.53 "Heroic"

* * *

ドビュッシー：ベルガマスク組曲

C. Debussy: Suite Bergamasque

- | | | | |
|------------|-----------|------------------|--------------|
| 1. 前奏曲 | 2. メヌエット | 3. 月の光 | 4. パスピエ |
| 1. Prélude | 2. Menuet | 3. Clair de lune | 4. Passepied |

モーツァルト：ピアノ・ソナタ 第11番 イ長調 K.331 「トルコ行進曲付」

W. A. Mozart: Piano Sonata No. 11 in A Major, K.331

- | | |
|---------------------------|--|
| 第1楽章：主題と変奏曲：アンダンテ・グラツィオーソ | 1st mov.: Theme and Variations: Andante grazioso |
| 第2楽章：メヌエット | 2nd mov.: Menuetto |
| 第3楽章：アラ・トゥルカ：アレグレット | 3rd mov.: Alla turca: Allegretto |

シマノフスキ：12の変奏曲 変ロ短調 Op.3

K. Szymanowski: Variations in B-Flat Minor Op.3

出演者の希望により、当初予定のプログラムから演奏順に変更がございます。

ラファウ・ブレハッチ 2023年日本公演スケジュール

2月25日(土)	東京	サントリーホール	主催：ジャパン・アーツ
2月27日(月)	川崎	ミュゼザ川崎シンフォニーホール	主催：神奈川芸術協会

ラファウ・ブレハッチ (ピアノ)

Rafał Blechacz (Piano)



©Marco Borggreve

2005年、第15回ショパン国際コンクール優勝。マズルカ賞、ポロネーズ賞、コンツェルト賞、ソナタ賞(クリスチャン・ツイメルマンにより創設)、オーディエンス賞と全てを同時受賞。同世代で最高のショパン弾きと称される。

彼のレパートリーはバッハ、モーツァルト、ベートーヴェン、リスト、ブラームス、ドビュッシー、シマノフスキと拡大を続け、その中からドイツ・グラモフォンより6枚のアルバムがリリースされた。この間の活動が高く評価され、2014年には、「ピアノのノーベル賞」とも称されるギルモア賞(アメリカ)を受賞。

1985年ポーランドのナクウォ・ナデ・ノテション生まれ。5歳からピアノを習い始め、ビドゴシチ市のルービンシュタイン音楽学校(ヤチェク・ポランスキ教授)を経て、ナワヴェジスキ音楽大学にてカタリーナ・ポボヴァ＝ズイドロン教授に師事、2007年に卒業。在学中より、第13回ヨハン・セバスチャン・バッハ・ポーランド全国コンクール第1位およびグランプリ(1996年)、第5回A.ルービンシュタイン国際青少年ピアノコンクール第2位(2002年、ビドゴシチ)、第5回浜松国際ピアノコンクール第1位なしの第2位(2003年)など数々の賞を獲得。

ショパン国際ピアノコンクール優勝後は、ウィーン楽友協会、ベルリン・フィルハーモニー、コンセルトヘボウ、サル・プレイエル、ロイヤル・フェスティバル・ホール、ミラノ・スカラ座など世界の名だたるホールで演奏活動を始め、ザルツブルク、ヴェルビエ、ルール・クラヴィーア、ギルモアといった主要音楽祭にも招かれている。デュトワ、ゲルギエフ、ハーディング、P. ヤルヴィ、ルイジ、ナガノ、ネルソンス、プレトニョフ、ヴィット、ジンマンなど世界的な指揮者と共演。

2006年よりドイツ・グラモフォンと専属契約。ポーランド人演奏家として、クリスチャン・ツイメルマンに続く2人目となった。初のCD「ショパン：前奏曲集」でエコー・クラシック賞、ディアパソン・ドール賞を受賞。その後、2010年にはショパン生誕200年を記念してセムコフ指揮ロイヤル・コンセルトヘボウ管と録音したショパンのピアノ協奏曲1番、2番でドイツ・レコード批評家賞を受賞。「ドビュッシー／シマノフスキ」ではエコー・クラシック賞、グラモフォン誌月間ベスト・アルバム、2013年クラシック音楽の最優秀録音としてフレデリック賞(ポーランド)を授与された。2013年の「ショパン：ポロネーズ集」は発売と同時にゴールド・レコードに輝き、再びドイツ批評家賞を獲得。2017年にはJ.S.バッハの作品集がリリース、2019年1月にはヴァイオリンのキム・ボムソリと共演した室内楽の作品集がリリースされ話題となった。今回の来日公演にあわせてショパンのピアノ・ソナタ2番、3番を含む新譜がリリースされる。

批評家たちからはこれらの芸術的功績を讃えてキジアナ音楽院国際賞(イタリア)を2010年に贈られる。2015年、ポーランド共和国大統領メダルであるポーランド復興勲章カヴァレルスキ十字勲章を授与された。

ショパン：ノクターン ヘ短調 Op.55-1

ポーランドに生まれたフレデリック・ショパン(1810～49)は、従来のジャンルや様式について、表現の可能性を深く追求したピアノ曲を、数多く書き残した。彼は、アイルランド出身のジョン・フィールドが創始したというノクターン(夜想曲)の様式に基づいて、繊細優美でロマンティックなノクターンを、21曲ほど作曲している。ヘ短調のOp.55-1は、1843年の作品。一歩ずつ進んでゆくような主題が印象に残るほか、再現部での三連符の連続なども特徴的なノクターンである。

ショパン：4つのマズルカ Op.6

マズルカは元来、ポーランドのマゾフィア地方に古くから伝わるマズールという踊りに端を発する3拍子の舞踏だが、ショパンの書いた約60曲のマズルカには、祖国の舞曲を普遍的な芸術作品に仕上げた様式化の跡がうかがえる。1830～31年に作曲されたOp.6は、素朴な曲想を持つ4曲のマズルカ。保続音、空虚五度、対旋律などが用いられていることにより、独特の民俗的な雰囲気がかっこいい、田園風の味わいを印象づける。

1.嬰ヘ短調 Op.6-1 2.嬰ハ短調 Op.6-2 3.ホ長調 Op.6-3 4.変ホ短調 Op.6-4

ショパン：ポロネーズ 第7番 変イ長調 Op.61 「幻想ポロネーズ」

ショパンは、ポロネーズやマズルカなど、祖国ポーランドの舞曲の形式を用いた名曲を数多く残した。1845～46年に作曲された「幻想ポロネーズ」は、その最も成熟した一例であり、晩年の傑作の1つでもある。曲のなかで、ポロネーズの本来の舞踏的な性格は、拍子やリズムの一部に残っているものの、全体は自由な形式で書かれている。神秘的な雰囲気を帯びた序奏に始まり、主要な楽想がいくつか現れて展開し、そのなかに、斬新な転調や重音のトリルなど、ピアノのさまざまな技法が効果的に盛り込まれている。そして最後は、いったん静寂に包まれた後に主和音が力強く鳴り響いて、劇的に終わりを告げる。

**ショパン：ポロネーズ 第3番 イ長調 「軍隊」Op.40-1
第4番 ハ短調 Op.40-2**

ショパンのOp.40としてある2曲のポロネーズは、1838～39年に作曲された。イ長調のOp.40-1(第3番)は、勇ましく堂々とした軍隊の行進を表しているように聞こえる主題から、「軍隊ポロネーズ」と呼ばれている。ハ短調のOp.40-2(第4番)の、悲劇的ながら威厳を保った主題については、クルピンスキという作曲家の書いたポロネーズ「ようこそ王様」の旋律を、短調に移して用いたものである、とする説がある。

ショパン：ポロネーズ 第6番 変イ長調 Op.53 「英雄」

1842～43年に作曲されたこのポロネーズは、列をなして堂々と進軍する英雄たちの姿を想像させる曲想から、のちに「英雄」の名で親しまれるようになり、今日ではショパンの最もポピュラーなポロネーズである。スケールの大きな序奏に続いて、3部形式で展開し、ポーランドの舞曲ポロネーズ独特の、勇壮な3拍子のリズムに乗って力強く進んでゆく。

ドビュッシー：ベルガマスク組曲

フランスの作曲家、クロード・アシル・ドビュッシー(1862～1918)は、繊細かつ鋭敏な感性によって、水や光などの自然の世界を独自にイメージした。4曲から成る「ベルガマスク組曲」は、1890年に着手されたというが、現在ある形で出版されたのは1905年。「ベルガマスク」とは、作曲者が留学中に訪れた北イタリアのベルガモ地方の舞曲「ベルガマスカ」に由来する、と従来は考えられてきた。一方、別の説として、ワトーの描いたイタリアの仮面喜劇の絵—仮面に隠れて悦楽にふけった17～18世紀フランスの貴族文化へのノスタルジー—ヴェルレーヌの詩集『華やかな宴』に含まれる『月の光』の一節にある「マスクとベルガマスク」という言葉を通して、ドビュッシーがイタリアの仮面喜劇に対して描いた幻想—、といったつながりも指摘されている。

第1曲「前奏曲」 教会旋法などを効果的に用いた、堂々とした1曲。

第2曲「メヌエット」 テリケートなタッチが味わい深い。

第3曲「月の光」 月の光が水面に輝く光景を、美しく描き出す。

第4曲「パスピエ」 元来は3拍子の舞曲である「パスピエ」を、ドビュッシーは4拍子で書き、新鮮な響きを印象づける。

モーツァルト：ピアノ・ソナタ 第11番 イ長調 K.331 「トルコ行進曲付」

音楽史上でも傑出した天才であったヴォルフガング・アマデウス・モーツァルト(1756～91)は、ピアノ・ソナタについては19曲ほど書き残した。1783年の作と推定されているK.331は、第3楽章が単独で有名な「トルコ行進曲」であることから「トルコ行進曲付き」の名で知られるポピュラーな1曲だが、第3楽章に先立つ2つの楽章も、それぞれ個性的な魅力を持つ。第1楽章は、ソナタ形式ではなく変奏曲形式で書かれており、第2楽章は、モーツァルトのソナタの中間楽章としては意外にも、メヌエットとなっている。

第1楽章 イ長調、変奏曲形式。アンダンテ・グラツィオーソの優美な主題の後、6つの変奏が続く。

第2楽章 メヌエット。イ長調、3部形式。典雅なメヌエットの部分と、歌謡的で穏やかなトリオ(中間部)が、美しく調和している。

第3楽章 アラ・トゥルカ、アレグレット。イ短調、変則的なロンド形式。トルコの軍隊の行進を表す独特のリズムが、効果的に用いられている。

シマノフスキ：12の変奏曲 変ロ短調 Op.3

ポーランドのティモシユフカ(現ウクライナ)に生まれた作曲家、カール・シマノフスキ(1882～1937)は、叙情的でロマンティックな作風を特色としている。1901～03年に作曲された「12の変奏曲」Op.3は、彼の最も初期の作品であり、ショパンやワーグナー、スクリャービンの影響を受けつつ、自己の作風を模索している時代のピアノ曲である。曲は、主題(アンダンティーノ・トランクイロ・エ・センプリーチェ、変ロ短調)と、12の変奏から成り、古典的な構成のなかに、多彩な変奏を繰り広げる。憂いを帯びたマズルカ風の第3変奏、簡素なコラル風の第8変奏、ワルツのスタイルによる晴れやかな第9変奏、技巧的で華やかさにあふれた最後の第12変奏などは、特に特徴的である。